

# 背中合わせの引力

## 登場人物

みずほ  
ひかり  
なおと  
あやか  
かなこ

大学の同級生  
みずほの恋人  
職場の後輩  
大学の後輩

## 場面

みずほの部屋  
会社（受付）

1場

みずほの勤務先の会社の受付。後輩のあやかと始業前の掃除をしている。

みずほ 「よし。こんなものかな。あやかちゃん、ミーティングしようか」

あやか 「あ、はい」

みずほ 「おはようございます」

あやか 「おはようございます」

みずほ 「えっと、今日は十時に丸西物産の飯田さま。十四時に左海商事の本村

さまが来社予定です。三階の会議室にご案内してください」

あやか 「はい」

みずほ 「それと、コピー機取りの業者さんがお昼頃に来るみたいだから、来たら総務に連絡してね」

あやか 「わかりました」

みずほ 「今日はそれぐらいね。よろしくお願いします」

あやか 「お願いします」

あやか、掃除道具を片付けに行く。

みずほ 「あまり忙しくなさそうね」

あやかが戻ってくる。携帯を見てため息。

みずほ 「どうかした？」

あやか 「みずほ先輩、見て下さいよ、これ」

みずほ 「え、なにになに」

みずほ、携帯を見る。

あやか 「どう思います？」

みずほ 「どうって？」

あやか 「ケンカの後にこれが送られてくるっておかしくないですか」

みずほ 「あ、じゃあ彼氏？それで元気なかったのね」

あやか 「そうです。これだけが送られてきたんです」

みずほ「それはちよつとヒドイかも。ケンカの内容にもよるのかな。いや、でもやっぱないかな。これだけってのは」

あやか「そうですね！おかしいですよねー」

みずほ「ちなみにケンカの原因はなんだったの？」

あやか「彼の浮気です」

みずほ「浮気かあ。隠れて合コン行ったとか」

あやか「合コンぐらいなら、まだ良いです。付き合いかもあるし、私も行くことあるんで」

みずほ「それはいいんだ。最近の子はそういうの普通なの？」

あやか「どうだろう。あ、でも周りの友達結構行ってますよ」

みずほ「そうなんだ。みんな自由なのね。じゃあ、何があったの？」

あやか「元カノとこつそり会ってたんです」

みずほ「ええっ！それは…ちよつと許せないわね。いや、ちよつとじゃないわ」

あやか「ですよ！絶対、許せない」

みずほ「でも、何で分かったの？」

あやか「女のカンです」

みずほ「女のカン」

あやか「今まで、そんなことなかったのに異常に携帯を気にするようになったんですよ。いきなりロックかけたりして。落としたら困るから、とかなんとか言つて。でも、お風呂にまで持つていく必要ありますか？脱衣所じゃないんですよ？お風呂の中。専用のケースまで買ってました」

みずほ「ないわね。なんか…すぐく分かりやすい」

あやか「そうですね。もうほんと馬鹿なんですよ。こうやって、並んでテレビとか観てるじゃないですか。そうすると、携帯を私のほうには絶対置かないんですよ。隠すように置いている。今までそんなことなかったのに」

みずほ「本当に分かりやすいのね！」

あやか「そうなんですよ！それで昨日…」

みずほ「えっ、昨日の話なの」

あやか「そうです。だからイライラが治まらなくて」

みずほ「あ、それなら仕事の後にゆっくり聞こうか？ほら、始業時間も近づいてるし」

あやか「もうちよつとなんで、お願いします。こんな状態で仕事なんて出来ません！」

みずほ「うーん…それなら仕方ない…か。それで？」

あやか「はい、それで昨日も一緒にいたんですけれど。彼がお風呂に入ってる時にふとテーブルを見たらあったんです。携帯が。そこに」

みずほ「…見たの？」

あやか「見てません！チャンスは何回もあつたんですけれど、さすがにそこまではと思って。でも私もう我慢出来なくて…」

みずほ「見たの？」

あやか「見てません！いや、見ようと思ったんですけれど、まだ見てなくて。いや、それは良くて。それで、来たんですよ！」

みずほ「何が？」

あやか「メッセージがです。あれって、ロック解除しなくても最初のほう読めるじゃないですか。そこに書いてあつたんです」

みずほ「何て？」

あやか「昨日はありがとう。やっぱり、ゆうくんとするのが一番良い♥今度、いつ会え…」

みずほ「うわぁ…」

あやか「気持ちわるい、気持ちわるい！」

みずほ「気持ちわるい、気持ちわるい！」

あやか「気持ちわるいですよね！不愉快！あー、またイライラしてきた！見てください、鳥肌」

みずほ「私も！え、それでどうしたの」

あやか「とりあえず、彼にメッセージ来たことを伝えました。そしたら、馬鹿みたいに慌てて出てきて。床びつしよびつしよですよ。やましいことあるのバレバレじゃないですか。それで、たまたま内容を見たことを伝えて」

みずほ「そうね、あくまで偶然」

あやか「そこから後は勝手に説明してくれました。二週間前から元カノと会ってること。キスはしたけど最後まではしてないって。信じられるわけないし聞きたくないじゃないですか」

みずほ「うん。もう何言っても無理かな」

あやか「だから、私もう何も言いたくないし、顔も見なくなつたんで、とりあえず窓から携帯を捨ててやりました」

みずほ「なるほど。あやかちゃんも結構やるわね。お疲れさま。大変だったのね。それで送られてきたのが…」

あやか「はい。あれなんです」

みずほ「あやかちゃん、別れたほうがいい！」

あやか「そうですね！私もそう思います。前からすごい自分勝手なところあ

「ただし、絶対に自分からは謝らないですよ！今回はさすがに謝るかと思つたら、あんなので済ますし。」

「大体、何で元カノに行くんですか。新しく好きな人が出来たならまだしも、何で過去に戻るんですか」

みずほ「男の人のほうが女々しいっていうしね」

あやか「私との時間は無意味だったって言われてるみたい」

みずほ「相手はそんなことまで考えてないわよ。大丈夫。あやかちゃんは若いんだし、これからもっと良い人に会えるわよ」

あやか「…そうですよ。そう思うようにします。早速、合コンに行かなくちゃ。先輩、ありがとうございます。仕事の前にすみません」

みずほ「いいのよ、じゃあ今日も頑張りましょう。よろしくお願いします」

あやか「はい。お願いしまーす」

受付に來客。それぞれ対応する二人。

みずほが外を見ると一人の女が立っている。

みずほ「ひかり…？でも、なんで」

あやか「どうかしました？」

みずほ「あ、いや知り合いがね…」

視線を戻すと、そこにひかりの姿はない。

來客の対応をするあやか。案内をするために席を外す。

みずほ「気のせいかな…」

オープニング

2場

みずほ「彼女とは大学の同級生だった。友達。親友と言っていい存在だったと思う。いつも笑顔で明るくて、彼女が居るだけでその場が元気になる。対照的な私と何故か気が合い、一緒に居ることが増えていった。」

大学を卒業した後、彼女はすぐに結婚した。そこで見た姿は本当に輝いていた。周りの人に愛され、それを受け入れている。

結婚後も少しは交流が続いていたけど、そのうち季節の挨拶を交わす程度になっていった。

いつのまに離れてしまったのか、離れていったのか。輝き続ける彼女の姿を私はどう受け入れたのだろうか」

明かりがつくと、そこはみずほの部屋。

なおとがソファで本を読んでいる。

みずほ「それで、どうかな？さっきの話」

なおと「若い女の子がいるって言えば、喜んで来ると思うけど」

みずほ「ほんと？じゃあ、引き受けてもらえる？」

なおと「ああ。でも何でそんな流れになったんだよ。その後輩の、あやかちゃん？と合コンしてくれて」

みずほ「いや、まさかそんな展開になるなんて思ってもなかったから。相談とかあったらいつでも乗るよって…言っちゃって…年上だし、いい恰好しようとしたのが間違いだっただけ」

なおと「なるほど。それで新しい出会いの場を作ってくださいと。あやかちゃんっていくつだった？」

みずほ「二十一歳」

なおと「若いな！」

みずほ「若いよ。同じ二十代なのに、始まりと終わりでこうも違うのかと思う。

使用前、使用後みたい」

なおと「言いつぎ。でも、それなら若い男もいっぱいいるだろ」

みずほ「うん、一応それは伝えたのよ。三十代の男の人って、もう肌は汚いし、ちょっと変わった匂いもするよって」

なおと「言いつぎだろ！」

みずほ「ごめん、でもそれでも良いって」

なおと「喜ぶとこなのか」

みずほ「若い男の子はもう良いんだって。やっぱり、男の人は三十過ぎてからですよって」

なおと「なんか、想像が膨らみすぎてる気もするけど。若いころに比べて何が変わったってこともないしな。敢えて言うなら見た目と体力だな」  
みずほ「そうねー。徹夜はきつくなってきた。あやかちゃんね、絶対に結婚したいんだって。二十五までに」

なおと「なんで？」

みずほ「なんとなく、ポーターラインらしいわよ」

なおと「そんなもんかねえ。でもまだ四年もあるよ」

みずほ「女の子にとって時間はあつという間なの。男の人には解らないと思うわ。身体がきれいなうちにドレスを着たいって。

大学の友達にも二十二で結婚した子いたけど、やっぱりキラキラしてた。元々、人気者だったしね。

そういえば、最近その子を見たの。会社の近くで」

なおと「へえ、近くに住んでるの？」

みずほ「そんなすぐ来れる距離じゃなかったと思う」

なおと「メールして聞いてみたら？」

みずほ「わざわざ？」

なおと「だって、気になってるみたいだし」

みずほ「いいの。そこまですることもないし」

なおと「あんま仲良くないんだ」

みずほ「そんなことないわ。大学の時はしょっちゅう一緒にいたし」

なおと「でも、みずほからその子の話を聞いたことないよな」

みずほ「結婚してちよつと遠くに行っちゃったし。最近では会ってないから」

なおと「まあ、そんなもんか」

みずほ「そうよ。それで、あやかちゃんの事なんだけど」

なおと「お、そうだった」

みずほ「きれいなうちにドレスを着たいのと、いい人はどんどん売れていくから、油断したら自分が売れ残っちゃうって。

残り物には福があるなんて絶対いやみたい。

私は気にしないけど、三十路前の独身女に言っちゃダメでしょ」

なおと「なかなかの強者だな」

みずほ「それも若さなんだろうけどね。仕事もさ、長く続ける気はないみたいだし。ほんとは若い子が多い仕事だから、私も先のこと考えないと。」

あ、ごめん。愚痴になってきた。合コンのこと、よろしくね。無理だ  
ったら断るから」

なおと「分かった。みずほ、あのさあ…」

みずほの携帯が鳴る。

みずほ「あ、ちよつとごめん」

電話に出る。

みずほ「もしもし。かなこ？久しぶり。そうね、もう決めないとね。いつにし  
ようか。…今日？これから？えーつと、ちよつと待ってね。

(なおとに)「ごめん。今から人と会ってもいい？大学の後輩。」

今度、サークルの仲良かったメンバーで集まろうってことになって、  
私と後輩が幹事なの。色々、決めることがあるから」

なおと「わかった」

みずほ「もしもし。うん、大丈夫よ。今、どこ？…じゃあ、結構かかるわね。  
場所分かる？うん、また分からなかったら連絡して。うん、また後で」

電話を切る。

みずほ「ほんとにごめん！」

なおと「俺も仕事が残ってたから丁度いいよ」

みずほ「また連絡する。そういえば、さっき何か言わなかった？」

なおと「あー、また今度ゆっくりで。じゃあ、帰るわ。俺も連絡するから」

みずほ「うん、気をつけて」

なおと、舞台から去る。

みずほ「あ、そうだ」

みずほ、部屋から出ていく。

部屋にひかりが現れる。

ひかり「お邪魔します…あれ？みずほ、いないの？」



部屋の中をウロウロする。ふと、サイドボードにある写真立てに気づき  
手にとって見つめる。ソファに横になり、そのまま寝てしまう。

みずほが入ってくる。手にはコンビニの袋。

みずほ「思い出してよかった。かなこ、コーヒー飲めないのよね。  
水でいいですって言うけど、逆に気を遣う…ってだれ！」

みずほ、ソファで寝ているひかりに気がつく。

みずほ「誰ですかっ！警察呼びますよ！早く出て行って」

ひかり「あ、やばい。寝ちゃってた」

みずほ「…ひかり？」

ひかり「あ、みずほ。久しぶりー」

みずほ「久しぶりじゃないわよ。どうして？」

ひかり「たまたまね、こっちのほうに来る用事があったから」

みずほ「そうじゃなくて。どうやって入ったの？」

ひかり「鍵かかってなかったよ」

みずほ「えっ！うそ！」

ひかり「ほんとほんと。チャイム鳴らしても出ないし、でも鍵は開いてるから  
てっきり寝てるんだと思って」

みずほ「確かにかけたはずなのに。しっかりしなきゃ」

ひかり「まあまあ、来たのが私で良かったじゃない」

みずほ「ダメよ。次からはもつと気を付けないと…」

ひかり「みずほのそういうとこ、全然変わってないね。考え過ぎってどうか。  
なんだか懐かしいわ」

みずほ「人の短所で懐かしまないでよ」

ひかり「ある意味、長所でしょ」

みずほ「ひかりのそういうとこも変わってない」

ひかり「ありがとう。久しぶりね」

みずほ「そうね。来るなら連絡してよね」

ひかり「ごめんね。なんか急に顔見たくなって。何年ぶりかしら」

みずほ「五年ぶりぐらいかな。ひかり、結婚した後、すぐ子ども出来て忙しそ  
うだったし」

ひかり「そっかあ。もうそんなになるのね」

みずほ「旦那さんとみくちゃんは元気なの？」

ひかり「元氣よー。もうね、じつとしてる時がない。私も一緒に動き回ってるわ。旦那は最近、忙しそうだけどお陰で家を建てることも出来たし」

みずほ「そうなの！すごい」

ひかり「私の力じゃないわ。旦那とね、両親がお金持ってるの」

みずほ「それでもすごいわよ。早くに結婚して子どもがいて、お金もある。順風満帆ね」

ひかり「そうかな？でも私はどつちでもいいの。そういう流れになったっていうだけで」

みずほ「昔からそうだったもんね…」

ひかり「なんか言った？」

みずほ「うん、ひかりは人気者だったなあって」

ひかり「そんなことないよー」

みずほ「そんなことある。だって、ひかりの周りにはいつも人がいた。みんな楽しそうに笑ってて、私ももちろん楽しかったし」

ひかり「気が合う人が多かったっていうだけよ」

みずほ「だから、そういう部分はひかりの長所だと思う」

ひかり「ありがとう。でもね、私もみずほにはすごく助けられたのよ」

みずほ「朝起こしてあげてたから？課題をよく手伝ってたから？」

ひかり「ちよつと…それじゃ利用してみたいじゃない」

みずほ「違うの？」

ひかり「違うわよー。あ、そうだ。ねえ、みずほ、あの人覚えてる？」

みずほ「あの人？」

ひかり「ほら、大学の時に。いつも首からカメラをぶら下げてて」

みずほ「ああ…キヤメロン！」

ひかり「そう！キヤメロン！」

みずほ「いたねえ、そんな人」

ひかり「何か今、ふっと思いついて」

みずほ「変な人だったよね。いつもカメラ持って、ひかりの周りをウロウロして」

ひかり「そうそう」

みずほ「景色撮ってますみたいな空気出してたけど、明らかにひかりを狙ってたもんね」

ひかり「そう。一度、振り返ったらキヤメロンがいたことがあって、その時にありえない態勢で写真撮ってて、ビックリしたことがある」

みずほ「やりそうー、気持ちわるかったよね」

ひかり「うん。でも他の友達は、ほっときなよとか、私のことが好きなんだよ

とか言って、全然気にしてなかったの。みずほだけだったんだよ。私の事を心配してくれたのは」

みずほ「そうだったけ？だって、あれは気持ちわるいでしょ。通報レベルだよ。しなかっただけ感謝されなきゃ」

ひかり「家に泊まりに来てくれたり、なるべく私と一緒にいるようにしてくれ  
たよね」

みずほ「そうだったね。多分、キヤメロンのフィルムの中は私の写真でいっぱいだよ。記念に欲しいぐらい」

ひかり「みずほがいてくれて、本当に心強かった」

みずほ「まあ、最後はキヤメロンに悪いことしたなあ。割っちゃったしね、カ  
メラ」

ひかり「…それなのに、ごめんね」

みずほ「えっ？」

ひかり「ううん、何でもない。これ、懐かしいね(写真立てを見せる)」

みずほ「ああ、みんなで撮ったやつね」

ひかり「変わったのかなあ。どうなんだろう」

みずほ「ひかりはあまり変わってなさそうよ」

ひかり「そんなことないよ。少なくとも、シワとお肉は…」

みずほ「大丈夫！私も同じ！」

笑いあう二人。

ひかり「もっと早く会えばよかった」

みずほ「…大人になると毎日で手一杯になるよね」

ひかり「みずほは結婚しないの？」

みずほ「私は…そうねえ…まだかな」

ひかり「相手はいるんでしょ？」

みずほ「一応ね…」

ひかり「…怖いのか？」

みずほ「怖い？」

ひかり「うん。みずほ、昔から何かに怯えてたっていうか、自分に自信がない  
ように感じてたから」

みずほ「怯えてた？えっ、なんでだろう？いや、多分、自信はなかったし、今も  
あるわけじゃないけど」

ひかり「必要以上にね」

みずほ「必要以上…何だろうなあ。よく解らないわ。あ、なんか飲む？」

ひかり「もうすぐ帰るから」

みずほ「そういうわけにはいかないわよ。コーヒーでいい？」

みずほがコーヒーを取りに行こうとすると、電話が鳴る。

みずほ「あ、ちよつとごめん」

みずほ、電話に出る。

みずほ「もしもし、かなこ。着いた？…迷った？何でよ、駅の南口から真つすぐで来れるのに。うん、だから一度、駅まで戻って。それは戻れるのね。慌てなくていいから。」

そうそう、今ね、ひかりが来てて…（電話が切れる）」

ひかり「かなこ？全然会ってないけど、変わってない感じがする」

みずほ「全くね。今度、サークルのみんなが集まろうって話があるの。私とかなこが幹事だから、決まったらまた連絡する」

ひかり「うん、楽しみにしてる。じゃあ、私は帰るわね。子どもも心配しちゃうし」

みずほ「わかった。気をつけてね」

ひかり「ありがとう。またね。今度はもつとゆっくり」

みずほ「うん、またね」

ひかり、部屋から出ていく。

みずほ「びっくりした。こんな急に会うことになるなんて。」

やっぱり変わってなかったな…」

呼び鈴が鳴る。

みずほ「きた。はい」

みずほ、玄関へ。かなこを伴って戻ってくる。

かなこ「すみません！遅くなりました！」

みずほ「相変わらねえね」

かなこ「ちゃんと真つすぐ歩いてたんですけどねえ…」

みずほ「初めての場所は絶対に迷う。変わってなさそうだって。ひかりが」  
かなこ「えっ、ひかり先輩来てたんですか？会いたかったー」

みずほ「だから電話で言ったじゃない」

かなこ「そうなんですか？全然気付きませんでした」

みずほ「相当、慌ててたからね。下で会わなかった？」

かなこ「私が着いた時、丁度エレベーターが降りてきたんですけど、ひかり先輩は乗ってなかったと思います」

みずほ「そうなの？エレベーター一個だし、七階から階段は大変だから、会う

かなと思っただけだね。あ、何か飲む？」

かなこ「私、コーヒー飲めないんで水で良いです」

みずほ「言うと思った。逆に気い遣うわ。ちゃんと買ってあるから」

かなこ「さすが！みずほ先輩。尊敬してます」

みずほ「調子良いわね」

かなこ「本当ですって、私、昔から尊敬してましたよ。みんなの事をしつかり見てくれて、頼れる先輩って感じでした」

みずほ「それはどうもー」

かなこ「信じてないですよー。だから先輩には色々話を聞いてもらったじゃないですか」

みずほ「確かによく聞いてた気がする。内容はもう忘れたけど。」

かなこ「この話はね、色々飛びすぎてて最後は何が問題だったか分からないの」

かなこ「そうですね？」

みずほ「そうですね。それで雑誌の編集者って大丈夫なの？」

かなこ「仕事の時はちゃんとしてますよー」

みずほ「全然想像つかない。最近はどう？忙しい？」

かなこ「やっとな落ち着いたって感じですね。グワーツときてバーツと過ぎていききました」

みずほ「分かんないけど大変そうね」

かなこ「感覚ですよー。まあ、自分で選んだことですから。先輩はどうですか？」

みずほ「んー。私は変わらさな。いつも同じことしてる」

かなこ「そうなんですか？でも受付の仕事って何か格好良いですよ。会社の顔じゃないですか」

みずほ「そうでもないわ。雑用みたいなことも多いし。ひかりにも相談とかしてたの？」

かなこ「ひかり先輩は、どちらかといえば憧れでした。自由で明るくて、私は絶対に無理なんですけど、ああいう風になれたらって」

みずほ「…そう」。

かなこ「それに先輩たちが二人でいる時はいつもすごく楽しそうで、それ見て良いなあと思って思ってたんです。私もそんな関係を築ける友達と出会いたいなって」

みずほ「当時はそうだとしても、大人になったら会わなくなるし、連絡もしなくなるわ」

かなこ「回数や時間じゃないんです。会いたって思える人がいることが大事なんです」

みずほ「そっか。かなこはどうだったの？」

かなこ「わたしですか？」

みずほ「うん。会いたって思える子に出会えた？」

かなこ「どうなのかな。仲のいい子はもちろんいますけど…親友なのかどうかは分かりません。いちいち、確認なんてしないですもんね」

みずほ「まあ、それも不自然かな」

かなこ「だから先輩たちは素敵だつてことです。お互いを認めてるっていうか、必要としてるっていうか」

みずほ「そんな風に見えてたんだね」

かなこ「そうですね。会ってないって言ってましたけど、なんだかんだで連絡取ってるんじゃないんですか？」

先輩がこのマンションに引越したのって最近ですよ」

みずほ「え…そうだ…私…ひかりに言つてなかった。引越したこと…変だよね？」

かなこ「あ、でもサークルの誰かから聞いたっていうこともあり得ますし…」

みずほ「そうね…そうかもしれない。じゃあ色々決めていこうか。まずはお店からね」

かなこ「あ、それなら提案があります！大学の近くにしませんか。

よく行つた居酒屋がリニューアルして、お洒落になったんです。

最近、友達と行つて来たんですけど、お店の人が覚えててくれたんですよ」

みずほ「そうなの？嬉しいけど、よく騒いでたから恥ずかしい」

かなこ「先輩、飲みだしたら止まりませんもんね」

みずほ「あなたに言われたくない。お店の番号わかる？」

かなこ「はい、ちよつとしてみますね」

みずほ「それと、ひかりには一応伝えたんだけど、決まったら連絡してもらえますか？」

かなこ「いいですよ。でも、先輩がしなくて構わないんですか？」

みずほ 「いいの、いいの。かなことも話がしたいと思うから」  
かなこ 「分かりました。じゃあ、全部決まったら連絡しておきますね」  
みずほ 「ごめんね、よろしく」

かなこ、電話をかける。

みずほ 「会いたいなんて思ってるわけない」

暗転

場面は会社の受付。あやかが一人で掃除をしている。

先日とは打って変わって変わって上機嫌。見るからにウキウキしている。

みずほが慌てた様子で登場。

みずほ「おはよう!!」

あやか「おはようございます。そんなに慌てなくても大丈夫ですよー。

まだ始業前です」

みずほ「電車がね…事故で止まっちゃって…でも会社まですぐだったから走ってきたの」

あやか「走ってきたんですか!」

みずほ「そうそう。新しく出来たレストランの近くから」

あやか「全然近くないじゃないですか。みずほ先輩すごい」

みずほ「遅刻は嫌なのよ」

あやか「そういえば先輩、いつも皆勤賞ですよね」

みずほ「ああ、昔からの癖みたいなものね」

あやか「でも、あれって何で頑張るんですか?体調悪いときは休んだほうが良いと思うんですけど」

みずほ「確かにね、何がもらえるってわけじゃないし、自分がしんどい思いするだけなんですけど。でも証拠っていうか、頑張ったことを形にしたい

の」

あやか「そうなんですけどねー」

みずほ「興味ないならいいのよ?」

あやか「そんなことはありませんよー。ちなみにさっきのレストランなんですけど、行ったことありますか?」

みずほ「ううん、まだ。そのうち行くこうかなって思ってるけど。どうして?」

あやか「実は私、この前行ったんですよー」

みずほ「そう。どうだった?」

あやか「すごく良かったです。ムードがあるし、料理も美味しかったです」

みずほ「そっかあ、私も今度行ってみるね」

あやか「そこで…」

みずほ「あ、もう時間よ。あやかちゃん、今日こそ仕事の後にゆっくり聞くら…」

あやか「プロポーズされたんです!」

みずほ「ええっ!」



あやか「先輩！声が大きいです」

みずほ「あ、ごめん、ごめん。ちょっとびっくりしちゃって」

あやか「私もですー」

みずほ「いや、でもなんで？この前の彼は？ゆうくんだったけ？」

あやか「そんなやつ、とっくに別れました！」

みずほ「それにしても急すぎない？」

あやか「人生って何が起るかわかりませんよね。前の彼と別れてすぐに合コンに行っただけです。先輩に頼んでたのは別のやつです。そしたらそこで、運命の人に会っちゃって」

みずほ「運命の人、ほんとにいたんだ…ちなみにいくつ？」

あやか「二十三です」

みずほ「一応、年上なのね」

あやか「向こうも私が気になってたみたいで。付き合って二回目のデートでプ

ロポーズされました」

みずほ「そんなこと、ほんとにあるのね」

あやか「ドラマみたいですよ。今まではそんなことあるのかなって思ってたんですけど、実際にされたらすごく嬉しくて」

みずほ「二回目か。よく決断できたね」

あやか「この人にとって思ったら、理由なんて後から考えればいいんです」

みずほ「そっか。私には真似できないことだわ。おめでとう」

あやか「ありがとうございます！なので私、今月で退職します。今まで、お世話になりました。それと、すみませんでした。彼氏さんにまでお願いしてたのに…」

みずほ「ああ。いいのよ、そんなこと。退職か、なんか寂しくなるね」

あやか「そうですね。あ、先輩、もし良かったら住所教えてください」

みずほ「なんで？」

あやか「だって、これからはこうして会うこともなくなっちゃうんですよ。私の近況はちゃんと伝えますからね！」

みずほ「…ありがとうございます」

あやかの携帯が鳴る。

あやか「すみません。先輩。ちょっとトイレに行ってきたいいですか？今日、あの日です…すぐ戻りますから」

みずほ「分かった。ゆっくりでいいよ」

あやか「はい」

あやか、軽やかな足取りでトイレに向かう。

みずほ「あやかちゃんも相当分かりやすいわ」

予定の確認などをしているみずほ。

視線を感じると、そこにはひかりの姿。

みずほ「ひかり!？」

ひかり「おはよう」

みずほ「何やってるの？」

ひかり「みずほの仕事を見てみたくなって」

みずほ「えっ?」

ひかり「入っちゃダメだった?」

みずほ「ダメじゃないけど…基本的にうちの会社に用がある人じゃないと。」

それより、こんな時間からどうしたの? みくちゃんだって家にいるんじゃない?」

ひかり「今日は旦那がみてるから」

みずほ「…そう」

ひかり「私、こういう場所に来るの初めて。卒業した後、すぐに結婚しちゃったから。意外と人がいないのね」

みずほ「まだ営業時間になったばかりだから」

ひかり「そっか」

みずほ「…ねえ、ひかり。そろそろお客様も来るし、社内の人も通ると思うから…」

ひかり「あ、ごめんね。急にみずほの顔が浮かんで。この前会ってから、みずほの顔がよく思い浮かぶの。そしたら、ああ会いたいなあって」

みずほ「それなら、また家に来て。そのほうがゆっくり出来るし」

ひかり「うん。仕事の邪魔してごめんね。じゃあ、また」

ひかり、去ろうとして、

ひかり「ねえ、みずほ」

みずほ「(周りを気にしつつ) なに?」

ひかり「今の仕事、楽しい?」

みずほ「えっ?」

ひかり「ううん、大学のときは人の役に立てる仕事がしたいって言ってたから」

みずほ「…何年も前の話。それに無駄な仕事だとは思ってないけど」  
ひかり「そうだよね。なんだか、みずほに対しての記憶は大学のときで止まっ  
てるみたい。変なこと言ってるごめんね」

ひかり、その場を去る。  
あやかが戻ってくる。

あやか「すみませーん。遅くなりました」  
みずほ「大丈夫？」

あやか「はい。先輩、なんかありました？」

みずほ「えっ…何もないわよ」

あやか「そうですか？なんか元気がないみたいなんで」

みずほ「ああ…走ってきたから疲れたのかな」

あやか「無理しないでくださいねー」

みずほ「ありがとうございます」

あやか「そういえば、さっきお客様来られてました？」

みずほ「えっ」

あやか「トイレから戻るときに声が聞こえてきたんで」

みずほ「えっと…そうそう！急用のお客様がね」

あやか「あ、やっぱりそうだったんですね」

先輩の声しか聞こえなかったんで、最初は電話だと思ったんですけど。

入り口のほうをじつと見てたから」

みずほ「随分ね、慌てていらしたから…大丈夫かなって」

あやか「大変ですねー。朝からバタバタしないといけないなんて」

みずほ「そうね。さあ、私たちも頑張らしましょうか」

あやか「はい、お願いします」

仕事を始めるあやかの横で、みずほは入り口を見つめている。

暗転。

ひかり「彼女と話をしたのは随分久しぶりだった。今までに会う機会が無かったと言えば嘘になる。何度か連絡をしようとしたこともあったけど、その度に拡がるのは懐かしさだけではなく、この想いが私をためらわせていた。

私の感じていることなんて、他人から見れば小さくたいした事のないものかも知れない。気にも留めず、通り過ぎて忘れてしまうもの。私の存在や意味も同じかも知れない。正しいかどうか解らない。けれど、それを決めるのはいつだって自分自身なのだ」

暗転

場面はみずほの部屋。

なおと「えーっ、結婚すんの？マジかよ。もう人数揃えたのに」

みずほ「そうなの。ごめんね、ほんとに」

なおと「いや、みずほのせいじゃないから」

みずほ「せっかく準備してくれたのに」

なおと「いいんだよ、気にしないで。それより、男は三十からじゃなかったのかよ」

みずほ「違ったみたい。理由なんて後から考えればいいみたいよ」

なおと「そんなもんかねえ」

みずほ「あやかちゃんの話になると、そればかりね」

なおと「若い女の子って一番遠いところにいる気がするんだよなあ。

だから気持ち解ってやれないっていうか、へえっって」

みずほ「私も全部は解らないもの。あ、そうだ。今日ね、これから後輩が来るの。今度の女子会のことだ」

なおと「でた。女子会」

みずほ「なによ」

なおと「女って好きだよなあ。女子会」

みずほ「まあね。話すことはいくらでもあるから」

なおと「じゃあ、俺は帰ろうかな」

みずほ「すぐ済むから居てくれていいよ。せっかくだし紹介しておくね」

なおと「後輩の女の子かあ。やばい！何か緊張してきた。着替えたほうがいいかな」

みずほ「…そのままでもいいから…」

なおと「それにしてもなあ。二回目で結婚かあ」

みずほ「もう幸せいっぱいって感じだった。ちよつと羨ましくなった。

あんな風に自分の思うままに行動出来たら楽しいだろうなあ」

なおと「今になって思うことって結構あるよな、若いときはさ、当たり前すぎて気付かなかったけど」

みずほ「そういえば、この前ひかりに会ったの」

なおと「ああ、あの大学のときの。会ったんだ」

みずほ「うん、少しだけね。家に来たの。でも昨日、職場にも来て」

なおと「会社に？なんで？」

みずほ「私の仕事を見てみたかったんだって」

なおと「どういうこと？」

みずほ「解らない。私のほうが聞きたいくらい。元々、マイペースな所はあつたけど」

なおと「そっか、でも会社に来てられるとなあ…」

みずほ「うん。さすがに迷惑だし、ほんとと言うとちよつと怖い」

なおと「久しぶりにみずほに会って嬉しかったのかもな」

みずほ「いきなり、仕事楽しい？って聞かれるし」

なおと「いきなりだな。それで、何て答えたの？」

みずほ「…答えられなかった。確かに大学のときはね、もつと違う仕事をしようと思ってたの。でも、それは可能性の話で、あまり現実味が無かつたっていうか」

なおと「解るよ、俺もそんな感じだった」

みずほ「大学生で先のこと考えてないっていうのもどうかと思うけど。

知らないうちに流されたり、気付いてもそのままとか」

なおと「まあ、みんながみんな自分のやりたいことを出来るわけじゃないしな」

みずほ「そうね、でも彼女はそうじゃない。あの頃のまま」

なおと「みずほも変わってないよ。写真でしか知らないけど、今と変わってないように思う」

みずほ「ありがとう。でもそこはしっかり変わってますから。

そうじゃなくて、雰囲気っていうか…色んなものを持つことが出来るの、彼女は。今だってそんな望んだわけじゃないのに結婚して、子どもや家を手に入れて。世間的に見れば、充分すぎるほどの幸せじゃない？でも、彼女は望んだわけじゃないの。ただ、手に入ってくるだけ」

なおと「そうか…」

みずほ「ほんとに仲は良かったのよ。会わなければ、ぼんやりといい思い出に

出来たのかも」

なおと「…」

みずほ「どうかした？」

なおと「みずほ、あのさあ…」

みずほ「うん」

なおと「俺と結婚してくれないか？」

みずほ「えっ」

なおと「結婚してくれ！俺と！」

みずほ「えっ！ええっ！このタイミングで？」

なおと「うそ！間違った？いや、このタイミングだろ」

みずほ「いや、分かんない！…でも待って」

なおと「何で？俺じゃだめか？」

みずほ「そんなことない。なおとの事は好きだし、すごく嬉しい。でも、ちょっと考えさせて」

なおと「俺のことが好きなら考える必要ないだろ。付き合ってもう三年だし。これからも二人で過ごしていけたらって。」

みずほ「だから親に会って欲しいし、みずほの両親にも会いたいんだ」

なおと「ごめん、でも俺は本気なんだよ。みずほのこと、大事にするから」

みずほ「…言ってなかったけど…私、親がいないの。ううん、生きてるけど、連絡は取ってない」

なおと「えっ」

みずほ「仲が悪かったの。私じゃなくて、親同士がね」

なおと「…どうして」

みずほ「分からない。小学生の頃にはもう、お互いを見て笑ってることなんてなかった気がする」

なおと「…みずほにたいしても？…なんていうか…冷たい態度というか…」

みずほ「私には笑ってくれるのよ、話もしてくれる。手を上げられたことも無かった。」

子どもだったけど、何とか仲良くなつてほしくて頑張ったわ。勉強はもちろんだし、家のお手伝いも。学校も絶対に休んだりしなかった。

でも、ダメだったの。いつまでたってもお互いを見ようとしなかった」

なおと「…うん」

みずほ「それならいっそ、ケンカでもしてくれたほうがよっぽど良かった。」

お互いの存在を少しずつ消していくとね。本人たちは気付かないけど、私自身も消されていきそうな気持ちになつた。

私に向けられていた笑顔が息苦しくて落ち着かなかったな」

なおと「みずほは頑張ったんだよ。だから、「両親のことはもうどうしようも無かったっていうか：その：今も？」

みずほ、首を振る。

なおと「じゃあ、良かったじゃないか」

みずほ「大学三年の時にね、父が亡くなったの」

なおと「えっ」

みずほ「ごめんなさい。なおとに隠し事ばかりしてる」

なおと「いや：お父さんは何で？」

みずほ「事故だった。ほんとに何でもない事故。ただ運が悪かったの。

葬儀で母は泣いてた。私にはほっとしていたようにも見えたけど。それでも、悲しむことが出来るくらいは父の居場所が残っていたんだ

と思うと嬉しかった」

なおと「うん、お父さんも嬉しかったと思う」

みずほ「：でも違った」

なおと「えっ？」

みずほ「近くにいたのは私だけだったから、他の人には聞こえてない。

でも、確かに言ってたの。涙交じりの声で。良かった。やっと終わってたって」

なおと「：」

みずほ「母は自分のために泣いていたの。父や私の場所なんて少しも無かった。

それを聞いたとき、すごく悔しくて哀しかった。どれだけ時間を重ねても届かないこともあるんだって思った。

卒業後はすぐに家を出たわ。それから母には会ってない」

なおと「：」

みずほ「ごめんなさい。本当はもっと早くに話すべきだったのかも」

なおと「いいんだ。話してくれて、ありがとう。」

勝手かもしれないけど、やっぱり俺はみずほと一緒に居たいよ」

みずほ「ありがとう。私、今とても幸せなの。」

でも同時にすごく怖くなる。この気持ちや時間を失ってしまったらどうしよう。自分が無意味な存在になってしまったら」

なおと「みずほは俺にとって必要な人だよ。それに親がそうだったからって、俺らがそうなるわけじゃない。俺たちには俺たちの人生があるんだから」

みずほ「解ってる。自分が同じようになるなんて、子どもみたいな心配だって。

でも、突然、不安になることがあるの。人から見れば馬鹿みたいなことでも、私の中では膨らんでしまう。でもそれを解ってもらうことはできない」

なおと「…これからもずっとそうなのか？」

みずほ「解らない。少し考えさせて」

なおと「そうか…」

電話が鳴る。

なおと「いいよ」

みずほ「もしもし、かなこ。…うん、分かった。ごめん、今日は外で会ってもいい？うん。駅まで行くから。最近、掃除をさぼってて片付いてないのよ。そう。ごめんね。じゃあ（電話を切る）」

なおと「俺が帰るから部屋に来てもらえよ」

みずほ「ちよつと外に出たいから…」

なおと「そっか…分かった…」

みずほ、部屋を出る。

なおと「はあく、失敗したのかな…どうすれば良いんだよ」

ひかりが部屋に入ってくる。

ひかり「みずほ？いる？」

なおと「誰ですかっ？」

二人、目が合う。

ひかり「みずほ？」

なおと「いやいやいや、何で無視するの」

ひかり「えっ、もしかして私のこと？」

なおと「あなた以外に誰がいるんですか！」

ひかり「そうなんだ。へえ」

なおと「なんですか？」

ひかり「いえいえ、気にしないでください」



なおと「で？」

ひかり「で？」

なおと「だから！あなた何なんですか、一体。勝手に入ってきたりして」

ひかり「ああ。私、みずほの大学の友人で…」

なおと「もしかして、ひかりさん？」

ひかり「はい。あ、みずほから何か聞いてますか？」

なおと「ええ、まあ。あの、みずほはちよっと出かけてて」

ひかり「そうなんですか…それじゃ」

ひかり、ソファに座る。

なおと「え？」

ひかり「え？」

なおと「待つんですか？」

ひかり「ええ、お邪魔じゃなければ」

なおと「はあ…。邪魔とは言えないだろ。みずほの言ってた通りだな…」

ひかり「え？」

なおと「あ、いや」

気まずい間

なおと「何か飲みますか？多分、コーヒーならあると思うんで」

ひかり「いえ、お構いなく」

なおと「そう…ですか」

沈黙。

なおとを見るひかり。

なおと「…何ですか？」

ひかり「みずほの彼ですよね？」

なおと「そうです。あ、言ってませんでしたね。桜井なおと言います。みず

ほとは三年前から付き合ってます」

ひかり「結婚するんですか？」

なおと「はい？」

ひかり「だから、みずほと」

なおと「…もちろん、したいと思ってますけど…つか突然だな」

ひかり「そっか。良かったあ」  
なおと「いや、でもまだ決まったわけじゃないし。返事はもらえてないから」  
ひかり「大丈夫。きつ上手くいけますよ」  
なおと「…適当だな…」  
ひかり「私、みずほにはずつと助けられてたんです」  
なおと「ああ、大学のときに。みずほから聞いてますよ。ひかりさん、人気者だったって」  
ひかり「そんなことないんです。確かに友達の数は多かったかも知れない、でもそれはたまたま合う人が多かっただけっていうか」  
なおと「それ、解るかも。タイミングってありますよね。逆に昔はそうでもなかったやつと、今会うと仲良くなったり」  
ひかり「そう。そんなもんだつたんです。楽しいことが大切で、それ以上は踏み込まない。私も周りもそんな感じ。だから、私、一緒に居たのにもんなの事をよく知らない」  
なおと「それも解る！学生の頃なんて、その場のノリだけで生きてた気がしますもん。なんで、もっと大切に出来なかつたかなあ」  
ひかり「そうですね。あの頃、大切にしていたモノがもつと違ってたなら。みずほは周りのみんなをよく見てたんですよ。相談も色々されてたみたいだし」  
なおと「ああ。目に浮かぶなあ。今もね、会社の後輩にはよくされてるみたいです」  
ひかり「私もです。悩みも将来の夢も。でも内容なんて、今考えたら大したことないものばかり」  
なおと「仲が良かったんですね」  
ひかり「…分かりません」  
なおと「えっ？」  
ひかり「私はみずほの事をよく知らなかったんです…ううん、知ろうとしなかった…」  
なおと「…何かあったんですか？」  
ひかり「…大学の時にみずほ、お父さんが亡くなったんです」  
なおと「ああ…」  
ひかり「私がそれを知ったのは、亡くなってからだいぶ後でした。教えてくれたのは別の友達で」  
なおと「みずほからは何も…？」  
ひかり「…」  
なおと「ひかりさん？」

ひかり「…お父さんが亡くなったすぐ後に、みずほから連絡がありました。ちよつと話したいことがあるって。でも…でも私は、それを無視してしまつた」

なおと「えっ？」

ひかり「その頃、主人と付き合い始めたばかりで浮かれていました。彼と過ごす時間が何より大切だと思つてたんです。そんな勝手な理由で私はみずほを独りにしてしまつた。その時の彼女がどんな気持ちだったのか。彼女の不安や悲しみを私は受け止めることをしなかつた」

なおと「…」

ひかり「そのことを知つたあと、すぐにみずほに謝ろうとしました。でも、笑顔でもう大丈夫という彼女を見て、私は何かが離れてしまつたように感じた…ううん、離れてしまつたのは彼女じゃなくて私なんです。自分のしたことから目を背けてしまつたの」

なおと「…大丈夫ですよ。ひかりさんの気持ちはきつとみずほに伝わります」

ひかり「そうでしょうか…」

なおと「うん、だつて嬉しいでしょう。自分のことを考えてくれてたつて分かつたら」

ひかり「…みずほはずつとどこか独りでいた気がしたんです」

なおと「うん」

ひかり「だから、みずほの事、よろしくお願いします」

なおと「…はい。いや、まだ決まつてませんから」

ひかり「大丈夫ですよ。なおとさんなら」

なおと「そうだといいんですけどね」

笑いあう二人。

みずほが帰ってくる。

みずほ「…ひかり」

ひかり「おかえり」

なおと「早かつたな」

みずほ「…うん、ほとんど決まつてるから」

なおと「そっか。あ、みずほが出かけた後にな、ひかりさんが来たんだ。

みずほを待ちたかつたみたいだから」

ひかり「昨日はごめんね。仕事の邪魔しちゃつて」

みずほ「ああ…別にいいよ。でも今度からは連絡してね。今日だつて家にいなかったし。あ、そういうえは携帯壊れてない？かなこが連絡してもつな

がらないって。これから家に行くって言ってたけど留守なら意味ないよね。まだ間に合うかな、ちよつと電話してみる。かなこもここに来れば良いし」

みずほ、電話をかけようとする。

ひかり「ねえ、みずほ。今の仕事楽しい？」

みずほ「またそのこと？」

ひかり「ごめん、余計なお世話だと思うんだけど」

みずほ「…すごく楽しい訳じゃないけど、つまらない訳でもない。言ってみれば普通ね。でも、そんなもんでしょ。みんな、自分のやりたい事をその通りに出来るわけじゃないんだから」

ひかり「そう。そうなんだけどね、まだ若いし別の仕事にだって挑戦出来ると思ってる」

みずほ「そんなに簡単じゃないの。この仕事しか経験ないし年齢的にも選択肢はどんどん狭まってくるの」

ひかり「でも、可能性はゼロじゃないんでしょ？」

みずほ「…探す時間がないの。勉強する時間もね」

ひかり「だからね、結婚すればいいと思う」

みずほ「えっ？」

なおと「えっ？」

ひかり「ほら、なおとさんと結婚すれば時間出来るし。ゆっくり探せそうじゃない」

みずほ「…」

ひかり「みずほはもっと自分のやりたい事を優先させたほうがいいよ。せつかく頭も良いのに」

みずほ「…ちよつと待って」

ひかり「さつきね、なおとさんとお話したけどすごく良い人だと思う。みずほの事、応援してくれると思う」

なおと「いや、結婚はまだで…」

みずほ「待ってって」

ひかり「ね、そうしてみるのもいいんじゃないかな」

みずほ「だから待ってって!!」

なおと「…みずほ」

みずほ「いい加減にしてよ!何年も会ってなかったのにいきなり現れて!」

勝手なこと言わないで!」

ひかり「…ごめん。みずほを怒らせたかったわけじゃないの。ただ、もつと自由生きる方法だと思って」

みずほ「私が何に縛れてるの？学生の頃とは違うのよ？そんな誰もが自由に生きれるなんて思わないでよ！今までの私を知らないくせに分かったような事言わないで！」

ひかり「だからこれからは、みずほの事を解りたいって思ったの」

みずほ「解るわけじゃない。なんでいまさら？あなたみたいに色んな人に愛されて、何でも手に入ってくるような人に解るわけないわ。

もう、いいから放っておいて。私はあなたに会いたくなくてなかつたの！」

なおと「みずほ。ひかりさんはお前の事を心配して…」

みずほ「あなたもひかりの味方をするの…？」

なおと「そうじゃないよ！俺はただ…！」

みずほ「帰って！お願いだから」

なおと、部屋を出て行く。

ひかり「…みずほ」

みずほ「何だよ。何で私のところに来たの。いいじゃない。あなたは幸せな未来を掴んでる。これ以上、何が欲しいのよ！」

ひかり「お願い、私の話を聞いて」

みずほ「聞きたくない！あなたの話を聞いたって、私は私のみじめになるだけなの。昔からずっとそうだった！あなたがいるせいで、自分の価値が消えていきそうだった。離れられて、どれだけほっとしたか。

そんな気持ち、解るわけじゃないでしょう！」

ひかり「違うの！みずほ。実はね…」

みずほ「お願いだから、もう帰って！」

電話が鳴る。

みずほ「…」

ひかり「もう…帰るから」

みずほ、電話に出る。

みずほ「もしもし…」

かなこ、舞台の外に登場（以下、電話のやり取り）

かなこ「先輩！」

みずほ「どうしたの？」

かなこ「大変なんです！先輩が！ひかり先輩が！あの…」

みずほ「なに？ごめん。よく聞こえない。どうしたの？家には行けた？

あ、ひかりはね…」

ひかり、そつと部屋を出て行く。

かなこ「…ひかり先輩、病院にいるんです！」

みずほ「えっ…何言ってるの？ひかりなら、今ここに…」

ひかりのほうを見るが姿はない。

かなこ「ご家族の話では、二週間ぐらい眠ったままらしいんです。だから面会

も出来なくて…先輩、私どうしたらいいですか…ひかり先輩がこんな

ことになってたなんて、なんかショックで…（驚きが治まらないまま、

話し続ける）」

みずほ「かなこ、大丈夫。落ち着いて、ね。今、どこにいる？これからそっち  
に行くから」

みずほ、電話をしながら部屋を出て行く。

暗転

みずほの部屋。

ひかりが入ってくる。伏せられた写真立てを手にとり見つめる。  
みずほが部屋に入ってくる。疲れた様子。

みずほ「…ひかり」

ひかり「かなこは大丈夫？」

みずほ「…うん、だいぶ落ち着いた。家に着いたって連絡もあったし」

ひかり「そう…良かった」

みずほ「ねえ、ひかり…どうということなの？」

ひかり「…」

みずほ「…どうということなのよ！？一体何があったの」

ひかり「みずほ」

みずほ「説明してよ！事故って何？入院してるって。じゃあ、ここにいるあなたは何なのよ！」

ひかり「みずほ、落ち着いて」

みずほ「どうやって落ち着くのよ。そんなこと言われて、私はどうしたらいいの」

ひかり「事故って言ったのね」

みずほ「…違うの？」

ひかり「…」

みずほ「ひかり！」

ひかり「…私、みずほが思ってるよりも…自分が思ってるよりも何もなかったの」

みずほ「…」

ひかり「結婚して私、幸せだったんだ。みずほ、前に言ってたよね、順風満帆だって。確かにその通りだったと思う。

変わり始めたのはいつからだだったのかなあ。気付いたらね、旦那の帰りがどんどん遅くなって家に居ない時間が増えていったの。

最初のうちはケンカもしたわ。寂しいとかもっと家族で過ごしたいとか。でも、言えば言うほど、あの人は離れて行ったの…からっぽの時間が増えていった」

みずほ「…」

ひかり「最初はね、離婚しようと思った。でも、みくのためにそれはしちゃい

けないって。せめて大人になるまでは我慢しようと思ったの」

みずほ「…そんなの…」

ひかり「…うん。馬鹿だと思う…それで、家には私とみくの二人だけになった…」

みずほ「…ひかり？」

ひかり「ご飯の時間だったの。でも、みくはオモチャで遊んで。ご飯だからお片づけしなさいって言っても、私の言うことなんて聞かないですつと遊んでたの。いつもだったら、別に何とも思わないことよ。でもその時は、みくと旦那の姿が重なったの。」

私はこんなに一生懸命頑張ってるのに、何で誰も話を聞いてくれないの…あなたまで私を無視するの？って思ったたら、悲しくて悔しくて…無性に腹が立って…それで…

ひどい事をしてしまったと泣いて謝った。こんなことはもう止めよう。ちよつとイライラしてただけだって。

…でもダメだった。少しずつ繰り返してしまったの。理性がどこかに飛んでしまったのかと思った」

みずほ「誰かに言えば良かったじゃない。親でも友達でも。あなたの周りには誰かいたはずでしょう！」

ひかり「そうね、でも誰に？」

みずほ「それは…分からないけど…」

ひかり「私にはいなかったのよ…心を打ち明けることが出来る存在が。」

それに気付いたとき、私の人生って一体何なんだろうって思えて虚しくなった」

みずほ「ひかり…」

ひかり「みくのこと、すぐに旦那と親に分かってしまった。見つけてもらえて安心した気もする。それから今後のことを決めるために、私はあの家で独りになった」

みずほ「…どうして…」

ひかり「独りになって色々な事を考えたり思い出したりしていたわ。一番多かったのが大学の頃の思い出」

みずほ「…」

ひかり「みずほにとっては思い出したくない過去なのかもしれない。でもね、私にとってはあの頃が全てだったのかもなあって。」

本当にみずほには感謝してるのよ。私を独りにしないでくれて、ありがとう」

みずほ「…どうしてこんなことになったのよ…」



ひかり「私、生まれ変わりたいって思ったの。もちろん、本当に死ぬつもりはなかった。自殺の真似事をして死んだつもりになれば、新しい自分になれるんじゃないかって。おかしいよね…多分、普通じゃなかったんだ」

みずほ「おかしいよ…言えば良かったじゃない！私に。聞いてくれるって解ってたなら、私に言えばよかった！」

ひかり「出来なかったの。解ってたから、なおさら」

みずほ「そんな…」

ひかり「私ね、ずっとみずほに謝りたかった」

みずほ「えっ」

ひかり「あの時、みずほを独りにしてしまったこと、私はずっと後悔してた。

私が不安な時、あなたは傍に居てくれたのに。本当に「ごめんね」

みずほ「…いいよ。いいから、もう」

ひかり「自分でも勝手だと思う。でも、会いたいつて想いは消せなかった。気がついたら、みずほの会社の近くにいたわ」

みずほ「じゃあ、やっぱりあのときは…」

ひかり「久しぶりに見たあなたは変わってなかった。でも相変わらず、どこか独りでいるような気がしてた」

みずほ「…うん」

ひかり「そのときに、みずほを助けたいって思ったの。今度こそは私が強くなるって」

みずほ「…何で？」

ひかり「みずほは私の親友だから」

みずほ「…いちいち言わないと思う」

ひかり「いいの。言いたかったら言っても。私にとって、会いたいつて思った人はみずほだったの。でも、結局みずほを怒らせちゃった。ほんとにね、もっとスマートにするつもりだったのよ」

みずほ「…解りづらいよ。言ってくれなきゃ解らない」

ひかり「ごめんね、時間がないような気がして」

みずほ「…時間がない…」

ひかり「うん、多分。何となくだけど」

みずほ「そう…」

ひかり「そうだ。みずほ、なおとさんとお幸せに。いい人ね。ちょっと軽い感じだけど」

みずほ「ほっといて」

ひかり「でも、みずほのことをちゃんと見てくれる」

みずほ「うん。そういえば、何でなおとにはひかりが見えたんだろう」  
ひかり「決まってるじゃない」

みずほ「えっ？」

ひかり「あの人はみずほの事が本気で好きなの。必要としてる」

みずほ「どういうこと？」

ひかり「私も同じ気持ちだから」

みずほ「なにそれ…そんなもん？」

ひかり「そんなもんよ。結構いい加減なの。でも、そんなものでしょ？」

みずほ「そうね。そうかもしれない」

笑いあう、二人。

ひかり「じゃあ、私はそろそろ行くわ」

みずほ「行くってどこへ」

ひかり「病院。今更遅いのかも知れないけど」

みずほ「…」

ひかり「じゃあね」

ひかり、部屋から去ろうとする。

みずほ「ひかり！」

ひかり「…」

みずほ「…またね…」

ひかり「…うん、またね」

ひかり、舞台から去る。

みずほ「そんなもん、か」

みずほ、写真立てを手にとり見つめる。

なおとが部屋に入ってくる。

みずほ「…なおと」

なおと「みずほ、さっきはごめん！俺、みずほの気持ちも考えずに…」

みずほ「ううん…私のほうこそ、ごめんなさい」

なおと「…俺はやっぱりみずほと一緒にいたい。時間かかってもいいから、みずほが安心できるような、そんな居場所になりたいって…」

微笑み、見つめあう二人。  
呼び鈴が激しく何度も鳴る。

みずほ「誰だろう…かなこかな。ちよっと待ってて」

みずほ、玄関に向かう。

あやか「(玄関のほうで) 先輩!」

みずほ「(玄関のほうで) あやかちゃん! どうしたの?」  
なおと「えっ?」

みずほ、あやかに押されるように部屋に入ってくる。

あやか「先輩、聞いてくださいよー」

みずほ「なに? 何があったの?」

あやか「彼との結婚、無くなっちゃいました!」

みずほ「えっ! 何で!」

なおと「えっ! 何で!」

あやか「彼が元カノと隠れて会ってて…!」

みずほ「またっ?」

あやか「またなんて言わないでくださいよー。もう! 男って何でそうなんです  
か! っていうか、私の存在って一体何なんですか!」

あやか、泣き出す。慌てる二人。

みずほ「あやかちゃん、大丈夫! そんな男と間違っつて結婚なんかしなくて良かったじゃない。大丈夫! あやかちゃんは若いんだし、これからチャン  
スがどんどんあるから!」

あやか「そうですよね…」

みずほ「そうそう!」

あやか「そうですよね!」

みずほ「そうそう!」

あやか「先輩、この前の事まだ有効ですか？」

みずほ「えっ？」

あやか「彼氏さんをお願いしてた合コンですっ！」

みずほ「ああ…どうなんでしょうか？（なおとを見る）」

なおと「えっ、ああ…」

あやか、なおとに気付く。

あやか「あっ！（みずほに）先輩の彼氏さんですか？早く言ってく下さいよー、

恥ずかしいじゃないですか。（心持ち態度を変えつつ）初めまして。

平沢あやかです。先輩にはいつもお世話になってます」

なおと「ああ、桜井なおとです。こちらこそお世話になってます」

あやか「…かっこいい…」

みずほ「えっ！」

あやか「あの、もし良かったら合コンしてもらえませんか？あ、先ずは連絡先

を交換しましょう！ふるふる出来ます？ふるふる。こうやって…」

みずほ「あやかちゃん！ちよつと、ちよつと匂ってみて。変な匂いするから！」

なおと「やめろって！」

幕